

## ■ 2-3 南山高等・中学校（女子部）

### (1) 学校としての戦略

本校は、1948年の創立以来、多くの先人たちの努力によって「地域から選ばれる学校」の一つに数えられるまでに成長し、現在に至っています。しかし近年は、中学入試合格者の一部(トップ層)が関東や関西の難関中学校へ進学する動きも顕著になってきており、受験生・保護者の広範なニーズに応えきれていない面があることも否定できません。現在、全国的にさまざまな学校改革が進められていますが、本校としても「どんな生徒を育てたいのか」という課題に対して、建学の精神の原点に立ち返り、2024年度を一つの目途に学校改革を進めていく所存です。以下、その重点課題について述べることにします。

#### 1. 「人間の尊厳のために」という建学の精神についての共通理解をはかる

生徒指導や各部署での方針策定・総括の際に、常に「人間の尊厳のために」という建学の精神に照らして事の是非を定めていく必要があります。われわれ教職員がまずは共通認識を持ち、率先して「人間の尊厳のために」生きる者であらねばならないこと、その原点に立ち返るべきことを、教員研修を増やすなどして共有・徹底を図っていきます。

また、生徒たちに目をやると、友人との距離感や関わり方がわからないがゆえの SNS をめぐるトラブルも増える傾向にあります。相手のことを思い遣る、相手の気持ちを推し量るといった基本的なことが抜け落ちてしまっていることも少なくありません。そこで、学校行事や特別活動、総合的な学習(探究)の時間などの指導内容の見直しを行っていきます。とりわけ中1・中2の低学年は、南山大学人文学部心理人間学科等の協力を得ながらコミュニケーション・スキルを磨くためのアサーションプログラム導入を検討していきます。

#### 2. 男女別学のミッションスクールとしての魅力を活かしていく

学習環境や施設・設備、大学進学実績等が学校選びの重要なファクターであることは確かですが、本校としては「男女別学のミッションスクールであること」も積極的にアピールしていきたいと考えています。女子校で教育を受けることのメリットと、確固たる価値観(キリスト教的人間観)を持っているからこそ多様性に対して柔軟な思考で応えていけることを、在校生や保護者の生の声を活かすなどして広報していきます。

キリスト教精神による教育が浸透していけば、生徒たちは、比較と競争の厳しいこの現代世界の中かで、絶対的な安心感(よりどころ)を持って生きていけるようになるものと確信しています。「知識は愛の道具にすぎない」ということを繰り返し伝えていくことで、不安に駆られて勉強に追われるのではなく、高い志を持って安心して勉強に勤しむことができるような学校にすべく、面談週間を設けるなどして生徒たち一人ひとりと向き合う機会を増やしていきます。

#### 3. 6ヵ年一貫にとどまらない視点

愛知県下の女子校で完全6ヵ年一貫教育を創立以来続けているのは女子部のみで、部活動をはじめ中高の枠を超えた生徒たちの縦のつながりには長い伝統があります。また、教科指導や学校行事も6ヵ年のスパンで考えられており、教員間の中高の垣根もありません。新学習指導要領に基づく新しいカリキュラムの策定、2021年度からの中学校全面実施、2022年度からは高校の年次進行実施と続きますが、完全6ヵ年一貫の伝統を活かしながら女子部独自のスタイルをつくりあげていきます。そして同時に、南山大学附属小学校や南山大学・大学院、系列校との連携・交流等についても、新規の取り組みを検討していきます。

## (2)教育・研究

### 1. 新カリキュラムの決定

大学入試改革・新学習指導要領に対応した新しいカリキュラムの策定作業を進め、2022年度4月からスタートします。大学入試改革では、学力の3要素と呼ばれる「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」をバランスよく評価することが求められています。具体的には推薦入試の拡大、調査書の拡充などが検討されています。不確定要素が多分にあります。柔軟に対応できるようなカリキュラムを考えていきます。とりわけ、総合的な学習（探究）の中身については重点課題とし、専門の委員会を設置してその充実を図っていきます。なお、高校のカリキュラムについては年次進行実施であるため、2024年度の完成となりますが、同時に実施学年についての検証も行いつつ教科教育のさらなる充実を図っていきます。

### 2. 部活動指導員の制度化と運用開始

教科教育以外の活動については、とりわけ、女子部における部活動を今後どうしていくかということが大きな課題となっています。見直しを迫られている理由の一つは、「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」（2018年3月・スポーツ庁）や「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」（2018年12月・文化庁）に基づく改革が求められていることです。生徒の健康や安全に十分に配慮した指導が求められている（指導者が必ず活動場所にいなければならないのではないかという考えなど）一方で、授業準備や生徒の面談等にも時間を割かなければならないというジレンマが現場の教員の間で生じていることです。もう一つは、いわゆる「働き方改革」（2019年1月25日に出された中央教育審議会答申）の観点です。

現在、40に及ぶ多様な部活動が存在することは女子部の魅力の一つともなっており、単純に縮減というわけにはいかないことから、校外で行われる大会等への引率が可能となる「部活動指導員」等外部人材の活用を制度化するなどして対応し、教員との協働で生徒たちの活動を可能なかぎり保証していきます。また、新たに生じる人件費負担の問題（誰がどの程度負担するのか）もあることから、受益者負担等さまざまな視点から財政面に関しても検討していきます。学園内の他の単位校とも調整・連携を進めるとともに、生徒・保護者に対しても丁寧に説明し、理解を得ていきたいと考えています。

## (3)施設・設備

### 1. 第1体育館の建て替え

築50年を過ぎ老朽化した第1体育館の建て替えは急務です。当初目標としていた2026年度建て替えを見据え専門家に意見を求めましたが、現在の建築基準に即して同敷地に立て替える場合、避けては通れない条件があることが確認されました。2020年度早々に新たに専門委員会を設置し、現体育館からの建物構造の変更や建設場所などを検討して問題点を解決し、学園内関係部署とも連携・折衝して早急に再立案を行います。その計画に従って、2030年度建て替え着工を目指して準備を進めていきます。また資金面の計画も立案し、2020年度より第2号基本金を組み入れていきます。

### 2. ICT環境の整備・活用

ICT環境の整備については、2020年度内に中1から高2までの5学年全HR（ホームルーム）教室に電子黒板機能付大型提示装置が常設されましたが、高3の教室については設置場所の問題もあり保留となっています。また、「生徒一人一台のPC環境」についても、「GIGAスクール構想」（2019年12月・文部科学省）や新型コロナウイルスの影響による国や県、他校の動向なども見極めながら、早い時期にBYOD(Bring Your Own Device)方式での導入を前提に整備を進めます。同時にストレスなく

授業に ICT を活用できるよう、専門のスタッフ(ICT 支援員)の常駐も検討していきます。

教育職員(専任)間では一人一台 iPad の活用が始まったばかりです。授業での活用はもちろん、同時に働き方改革の一環としての会議時間の短縮や、ペーパーレス化等による経費や資源の削減を進めていく計画です。

#### (4)社会貢献

##### 1. ボランティア意識の育成

学校全体の取り組みとしては、年に 2 回実施している地域清掃とクリスマス献金等の寄附活動を続けてきましたが、新規の全学的な活動についても検討します。それ以上に、学年やクラス単位、部活動レベルでボランティア活動等への参加意欲が高められるよう、啓発活動を行っていきます。

#### (5)財政および経営改善計画

財政の改善を進めるべく、2020 年度から寄附金募集を開始し、実験実習料の増額を行い、収入増加を図っています。寄附金は個人一口 1 万円、法人一口 5 万円とし、広く協力を呼びかけていきます。実験実習料は徴収対象を高校 3 年生まで拡大し、かつ徴収金額の増額を検討します。これらにより、継続した収入増加が見込めます。また、新たな補助金獲得を目指すとともに、現状の安定した学生募集を維持していくため広報活動にも力を入れます。支出に関しては、第 1 体育館建て替え、ICT 教育への投資など支出の増加が見込まれるため、中・長期の資金計画を具体化し、安定した支出計画を立てていきます。

#### (6)組織運営と人材育成

##### 1. 働き方改革の具体化

働き方改革が求められるなか、2020 年度から勤怠管理システムを導入し、客観的な労働状況の把握を行い、2022 年度からスタートする新カリキュラムと連動して校務分掌等組織の再編や行事の見直しを行うことにより改善を図ります。

##### 2. 外部人材の活用

学校行事や部活動等のバックアップのために、育友会(保護者の会)に積極的に協力を求めています。上述したように「部活動指導員」の制度化を検討していますが、それについても育友会と連携・協力して持続可能な仕組みを作っていくことを計画しています。

##### 3. 南山国際高等学校・中学校閉校に伴う教育職員の移籍人事

同計画に伴い、2021 年度に 1 名、2022 年度にさらに 1 名、2023 年度に 4 名、計 6 名の専任教職員が本校へ異動してくることになりますが、南山国際高等学校・中学校での経験を十分に発揮していただくことは本校の活性化にもつながります。率直な意見を伺いながら本校の教育活動全般にわたる自己点検を行っていく計画です。